

後 記

本学会の歴史編纂は、昭和48年創立50周年記念事業の一つとして企画され、編纂委員会（委員長 有馬 啓氏）が発足し、54年まで作業が行われた（第一次委員会）。当時の委員会メンバーは下記のとおりである。

有馬 啓（東大）、安藤則秀（九大）、大矢富二郎（岩手大）、小幡弥太郎（大妻女子大）、金森正雄（京都府大）、川口桂三郎（京大）、田村三郎（東大）、中西武雄（東北大）、林 金雄（岐阜大）、藤巻正生（東大）、船津 勝（九大）、三井哲夫（京大）〔12名、敬称略〕

まず、各大学・研究所の研究内容の紹介のための資料収集から始められた。これには、松居宗俊専務理事がもっぱら衝に当たられた。しかし、同氏の逝去によって、中断の止むなきに至った。

ここに第一回委員会における同氏の挨拶文を掲載することにする。

第1回農芸化学史編纂委員会に当って

松居専務理事の挨拶

わが日本農芸化学会が昭和49年に創立50周年を迎へるにあたりまして種々の記念事業を行うことが決まり、その一つとして農芸化学史を編纂し、貴重な記録としてとどめ、今後の発展に資したいと理事会にはかりましたところ、幸諒承が得られ、専門委員会を設置して、この業務を遂行することになりました。今日はその第1回の会合であります。皆様年末御繁忙のところまで御出席頂きましたことをまず以て世話役として厚く御礼申し上げます。今後1年有余よろしくお願致します。

本日は主として当委員会の運営の基本方針を御決定頂きたいのであります。それに先きだち委員長をお決め頂き、その委員長のリードによって今日の会合を果のあるものに致したいと存じます。

一口に50年と申しますが、それは実に永い年月でございます。ましてこの50年はわが国家自体が歴史始まって以来かつて見なかったような迂回曲折を経た時代であります。また科学技術の進歩は文字通り面期的な進展を遂げた時代であります。その間当学会もその時代の流れに竿をさして激流に呑まれんとしたことも再三ならずであります。そして遂に今日の繁栄をかち得るに至ったのであります。皆様先刻御承知のように我が国の農芸化学は日本は勿論国際的に見ましても確かに特異な存在であります。その研究領域は実に多岐にわたっておりまして生物に関連するあらゆる分野を包含していると言っても過言ではないと存じます。またそれ故にいろいろ問題がないとは申せません。50年間農芸化学が手掛けて参

った分野に於てもいくつかが独立して新しい学会を生むに至り、そして各発展して参っております。勿論そのことを非難する心算は毛頭ありませんし、それこそ発展の必然の結果とも申されます。たゞ主家である農芸化学がともすれば却って専門外の人々の目には焦点がぼけてしまっているのが現状であり、甚だしき場合は、過去の古い学問の如き認識しか持っていない人々すら見かけるのであります。これが各方面と接触して得た私の偽らざる感懐であります。この事實はまことに残念と申すしかございません。この故にもここに50周年を迎へるに当ってわが先輩諸氏が多大の苦心をして迎へて来られた道をあらためてよく見極め、現在我々が立っている位置、あるいはその意味を確認することは強ち無駄でない、否まさに絶対に我々がなさなければならぬ反省と存じます。そしてその反省の上に立って学会の再出発を期し大いに世を啓蒙する位の意気がなければと存ずるのであります。更には正確に将来を展望して今後の進路に過ちなきを願うのであります。

このような意味におきましてこの歴史編纂は単なる過去への追慕、追憶であってはならず、この50年の発展経過を徹密な分析によって解明し、この学問の存在理由を明確にしたいと考へております。巻間何十年史と云うものが編纂され、贈呈をうけても読まれもせず、書棚の片隅に放り込まれてしまう例が多いのであります。わが学問の発展史にはかかる浮目を見せたくない、面白く一読意義のあるものに致したいのであります。そのような意味から致しましても、単に事実の羅列にとゞまることを極力避けその歴史の下に脈々と流れ来た思想なり哲学なりをすくい上げて、その解析から始めることといたしたい。その思想なり哲学から生れ出た研究が如何にその時代々に反映したか、そして結果更に新しい研究を芽生えさせて来て次の時代にいかなる影響を与えて来たかを充分にさぐりたいのであります。農芸化学は我が国にあっては極めて稀れなケースである実学と称される学問であります。多くの資料を基調として正確な歴史的事実をもとにして以上の抱負を文章となして後世に残したいのであります。いや現在研究に従事している若き学徒に直ちに役立つものであって貰いたい、そんな歴史書でありたい気持は望外のことでありましようか。我々現代に生をうけてこの農芸化学と云う分野に研究を行ない、行ないつゝあるものでなければなし得ないのであります。考へようによっては千載一遇の好機でもあり、今我々がこれをなさなければ今後の人達には不可能事となってしまうことは火を見るより明かであります。

次の世紀は「生物の時代」とさえ云われているのが昨

今であります。そして世界の化学界は挙げて何らかの意味で生物を対象とした研究に取り組んでおります。いや物理学者さえこの範ちゅうに入って参っております。農芸化学こそまさにその先驅をなしたのであり、そして次の時代には科学界の寵児となり得る分野でもあります。そのような環境にある我々の今後への第一歩としてまず反省から始めるこの歴史編纂こそ、重大な意義があるものと云わなければなりません。

本日お集り頂きました諸先生には夫々の御要職にあり御研究その他に寸暇なき毎日であることは百も承知の上で敢へてこの困難な歴史編纂の業務をお願いしておるのであります。願わくば本事業がスムーズに進み、その結果生れるであろう一冊の本が単に学会関係者のみでなく、広く々々世の注目を集め、農芸化学の一大エポックとなり、近代的イメージチェンジを行い得ることを心からお願いいたしますと同時に、これが次の大発展へのスプリングボードとなることを祈るものであります。当学会もその驥尾に附してさらにさらに発展し得るならば私としてこれに勝る幸福はないであります。

以上諸先生の絶大な御協力をお願いして私の御挨拶と致します。

* * * * *

その後、本学会が60周年を迎えるにあたり、作業を再開することが理事会で決定し、昭和59年第二次委員会が発足した。折りしも会員や業界から寄せられた記念募金の一部を充てて出版物とすることとなった、学会史・社史といった刊行物は、一般的に馴染みにくい種類のものであり、本学会構成員の過半数が20、30代の気鋭の研究者であることをどうしても意識せざるをえない。そこで、一体どんなものを作ったら読まれるようになるか、数回にわたって論議を重ねた結果、ようやく構成がまとまり、結局「農芸化学」と言う我が国固有の学問体

系の発祥とその発展、及びそれを支えてきた農芸化学会の活動を忠実に迎るといふ、第一次委員会の路線を継承することとなった。さらには、それらをもとにして過去、現在の分析と将来への展望を明らかにすることも必要と考えられた。諸先生には御多忙の中、このような難しい注文をよく御理解のうえ御執筆いただいたことを、心から感謝する次第である。

この種の刊行には、内容の正確さ、および完全さを期することは言うまでもない事であり、編纂委員一同としては十分に努力したつもりであるが、なお多くの誤りと脱落が有ることが予想される。この点について、一層の御叱正を賜りたい。

最後に、本刊行が21世紀への飛躍の踏み台として、少しでも役だってくれることを期待して止まない。

昭和62年2月15日

第二次農芸化学史編纂委員会

(敬称略、五十音順、委員会13名)

委員長 神 立 誠 (東大名誉教授)

委員 荒 井 綜 一 (東大・農)

大 石 邦 夫 (東大応徴研)

駒 野 徹 (京大・農)

高 橋 健 (東農工大名誉教授)

中 村 良 (名大・農)

水 谷 純 也 (北大・農)

一 島 英 治 (東農工大・農)

小 林 彰 夫 (お茶大・家政)

鈴 木 昭 憲 (東大・農)

内 藤 博 (東大・農)

林 勝 哉 (九大・農)

山 内 文 男 (東北大・農)

事務局 原 田 積 雄、野 田 新 五

農芸化学の100年

昭和62年2月15日 発行

発行者 社団法人 日本農芸化学会 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル内
電話 (811) 8789 振替口座 東京 0-68187
製作者 財団法人 学会誌刊行センター 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル内
印刷者 新日本印刷株式会社 東京都新宿区市谷本村町 3-29

© 1987 社団法人 日本農芸化学会